

**Tonya Callaghan.**  
**That's so Gay!: Homophobia in Canadian Catholic Schools**

鵜海 未祐子

**本書の構成**

概要

謝辞

第1章 本論主題への序文

第2章 理論枠組み

なぜクィア理論なのか？

クィア理論とカトリシズムとの接触

いかにしてホモホービアが機能するのか

第3章 文書の分析

カトリック文書

世俗文書

第4章 ナラティブの挿話

方法としてのナラティブ研究

ナラティブ挿話の分析

第5章 教育政策へのメッセージ

出典

付録A インタビューの質問

付録B 同意フォーム

研究参加者の同意書

研究アシスタント／写字生の秘密同意書

**図書紹介**

近年のカナダでは、ホモホービアやトランスホービアの広がり、それに由来する学校いじめの増加や自殺の発生を背景として、とくに公立（＝公費）学校において、LGBTQ の子どもたちや教育関係者の人権を保障する教育政策・実践・研究が精力的に進められてきている。市民や教育関係者の多くは、安全で安心な教育環境の形成にとって、LGBTQ インクルーシブ教育の広がりの必要性を自覚するに至っている。

とはいえ、LGBTQ 教育政策の実施は試行錯誤の段階にあり、とりわけ「信教の自由」を理由とする宗教的不一致との間で、ときには裁判も伴いながら激しい政策論争が繰り広げられてきていることもまた事実である。本書が焦点を当てるのも、まさにこの宗教的不一致に基づき、州主導のLGBTQ 教育政策に抵抗を示してきたカトリック系学校のヴェールにつつまれた実態や矛盾の解明にある。とくに公費学校として、無宗派系のみならずカトリック系も存在するオンタリオ州やアルバータ州では、政治的なイシューとして市民の関心も高まっており、本書でも検討対象の地域とされている。

著者は、以前に勤めていたカトリック系学校での教員経験の過程において、LGBTQ 生徒の自殺に直面しており、そのことが研究の道に進む中心的な後押しとなったとされる。現在は、アルバータ州のカルガリー大学教育学部で准教授を務めながら、同州の LGBTQ 教育政策の動きに影響を与えている。そのみならず著者自身、カトリックの家庭に育ち、カトリック系学校の卒業生であり、性的少数者としてカトリック系・非カトリック系学校やヨーロッパのインターナショナル学校などで働いてきた。その成長過程や雇用環境における彼女の性的指向に対する差別・抑圧体験に基づき、本書の目線は、当事者（集団）やカトリック系学校に内在的であると同時に、学術的な教育政策研究を展開できる地平に向けられている。その意味で、著者はカナダでも数少ない勇気を伴う立場に立つ LGBTQ 教育問題の研究者の一人である。

第1章では、本研究の主題、目的、方法、意義といったように大まかな骨組みが提示されている。著者によれば本書は、カナダのカトリック系学校において、ホモホービアや異性愛主義がいかに構造的に作用しているのかについて、理論的枠組みの考察と設定、関連文書の分析、インタビューに依拠したナラティブの挿話など「マルチメソッドアプローチ」を用いて明らかにするものである。その独自性は、従前のクィア理論研究に不足してきた制度や政策という文化実践的なコンテキストにおけるクィア当事者の在りようや、カナダ独自のシステムとして憲法上保障されてきた、公費に基づくカトリック系学校における LGBTQ 教員の処遇や LGBTQ 教育政策への対応の実態にフォーカスした点にあるとされる。

第2章は、3本立ての構成となる。まず侮蔑を伴ったクィアという用語の再生可能性・必要性が考察される。著者は、一定の固定的なアイデンティティを要するクィア政治と、むしろ固定的なアイデンティティの永続的な脱構築を図るクィア理論との間に横たわるクィア・ディレンマを踏まえつつも、多数性とインターセクショナリティの広がりに向けて、客観性や本質性を疑いつづけるクィア理論に期待する。そしてクィア理論とカトリシズムを出会わせることによって、カトリシズムに広がる格言としての「ゲイでいることはオーケー、ただ行動に移さないで」というフレーズが、ホモセクシュアリティのアイデンティティに対する差別的で抑圧的な省略を意味し、彼ら／彼女らに独身か純潔を要求している状況を批判的に指摘する。

つぎに LGBTQ 教員もまた、教室クローゼットの状況に置かれる中で、アイデンティティ・マネジメントとして3つの戦略を編み出したことに著者の分析は進む。「異性愛者としてやり過ごす」戦略、「他者から自己を遠のける」戦略、「同性愛から自己を遠のける」戦略の3つである。しかし著者は、そのようなアイデンティティ・マネジメントが、LGBTQ 教員にとって著しく抑圧的に作用し、不健康や精神的疲弊を引き起こし退職しやすい状況を生み出していると警告する。

さらにホモホービアの機能する仕組みについて、ミシェル・フーコーによる「正しい訓育の手段」と「監視」理論や、アントニア・グラムシによる「ヘゲモニー」理論が参照、援用される。著者によれば、それらの理論に照らすと、伝統的な権威であるカトリックの位階制や教員に求められる過剰で恣意的なカトリックの色合いが、カトリック系学校における構造的なホモホービアを導出しているとされる。

第3章では、カトリック側と世俗側のそれぞれの政策文書に分析が加えられている。カトリックの公式見解として勢力を保持するカトリック教会の教義問答書、ヴァティカン的一般通達を丹念に分析された後、カトリックの間に横たわる意見や解釈の相違に注意が払われる。そして、アルバータ州とオンタリオ州におけるカトリック系学校用の教義問答書が分析に付され、

性的少数者に対する同情や理解を示す一節とともに、道徳的な悪であるという一節も混在していることなどが指摘される。

世俗側の文書としては、関連判例・法や「カナダ権利と自由の章典 (Canadian Charter of Rights and Freedoms)」などが考察対象となっている。興味深いのは、「カナダ権利と自由の章典」に照らして、LGBTQ 教育政策批判の中心的な論拠となってきた第2条の「信教の自由」が、第15条の「平等の権利」と拮抗することをめぐるジレンマの克服可能性を、第1条を媒介した「制限つき条項」として「信教の自由」の有限性を論理明解に示唆していることである。

第4章では、著者を含む性的少数派の教員経験者による7名（そのうち4名はすでに退職）のライフナラティブの挿話について検討が加えられている。例えば LGBTQ 教員は、ホモホービクな異性愛主義の浸透するカトリック系学校の環境において、ゲイやレズビアンとしてのアイデンティティと教員としてのアイデンティティを分ける二重生活を強いられている状況が明らかとなる。その結果、カトリック系学校における LGBTQ 教員は、燃え尽き症候群を起しやすく、被抑圧的に働き続けるか退職をするかの二択に帰結する。しかし LGBTQ 教員のアイデンティティを見える化することで幸福度があがること、そして彼ら／彼女らの健康的な存在が何より同じ境遇で苦しむ生徒やクィアの若者にとってポジティブなモデルとなること等々、力強い著者のアイデアも論拠付きで示される。

第5章では、著者による教育政策へのメッセージがまとめられている。それによれば、とくにカトリック系学校における LGBTQ の児童、生徒、若者たちに対するホモホービアに由来する危機的状況が自覚されている以上、またカトリック系学校の教員不足が差し迫ることをふまえても、LGBTQ 教員の健康的な存在は状況改善にとって鍵となる。公費に基づく学校として、「信教の自由」以上に性的差別・抑圧に対する「人権」保障に努め、カナダの文化的多様性に即応してゆくのが今、カトリック系学校に求められる市民的責務であるというのが著者の中心的なメッセージである。

本書の貢献は、なにより LGBTQ 政策論争の争点となってきたカトリック系学校の論理や実態と真正面から丁寧に向き合い、公費に基づく学校としての矛盾や課題をうきぼりにし、カトリック系学校にとっても将来に開かれた方向性を示唆した点にあるといえる。その後、現在までにカトリック系学校の LGBTQ 教育政策への歩み寄りが少しずつなされてきていることは、併せて前向きに指摘しておきたい。

## 書誌情報

Callaghan, T. D. (2007). *That's so gay!: Homophobia in Canadian Catholic schools*. Saarbrücken, Germany: VDM Verlag Dr. Müller.

## 付記

本研究は、科学研究費研究活動スタート支援（課題番号17H07062）の助成による研究成果の一部である。